

東京電力福島第1原発事 わったのだ。

の村で見たなそうとしての村のようである。新移民となつて来た人々と話すと、そんな人間群像が浮かんでくる。総じて、若者も中堅の世代も年配の人たちも、飯館村が「再出発の場」になっている。そして、原発事故問題を『ひと』と捉えては、電力会社

連載「飯館村に生るる」に登場した人々の生き方を振り返ってみたい。

移住者を一人一人訪ね歩いた。共通しているのは、被災地・飯館村が、人々の「再出発の場」になっていたことだ。

一度社会に出た中堅の世代。彼ら彼女らは奮闘努力をした。しかし、厳しい現実社会があつた。人には言えない悩みを抱き、挫折を経験したのであろう。「場を変えてもう一度、チャレンジしてみたい」と思つたに

れは、新天地を求め欧州から米大陸に渡つた人々が掲げたフロンティア精神と、明治維新後、北海道に渡つた開拓移民の気概に通じるものがある。先のことを誰にも分からない。しかし、「新しい土地に夢をか

や政府への批判、評論家の発言で終わつてしまつた。しかし移住者たちは、批判で終わるわけにはいかない。これからこの村でどうやって生きていくのか、『わがこと』として明日の生業を考へなくてはならないのだ

飯館村は原発事故で被災
ちがない。その場を新天
した。しかし、豊かな自然
地・飯館村に求めた。
と広い土地が残った。全村
人としての務めと義務を
だ。

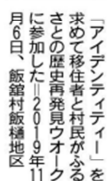
「けてみたい」との思いを入
め、この村にやって来たの

避難で一時「白紙状態」になり、広い大地が「白紙状態」になった。伝統と因習にとらわれた村社会は崩れ、しがらみのない世界に切り替わって戻った。証しを、こ

終え、人生の最終年に被災地・飯館村を選んだ年配の村人がいた。村人に寄り添いながら自らの人生を振り返る。生きた証しを、こ

交通網の整備が、移住に有利に働いた。かつての飯館村は「陸の孤島」が代名詞だった。しかし、現在は、車社会の発達で道路

生まれ、仙台チャナリスト。第1回ムラ優秀賞。



網が整備された。移住者にとって、仕事をする上で交通問題はかつてほどのハンライではなくなった。村に住みながら北関東を仕事場に持つ人もいる。東北新幹線を利用して週に何日か、東京の専門学校に通い講師を務めるものもある。特産品を開発、商品の販売はSNSを使えばアルタイムで全国へ世界へ発信できる。移住者は放射能問題はあまり気にしない様子だ。もっとも気にしている人は、初めからの村に移住して来ないだろう。村民と同じ目線で風評被害や

佐藤 昌明

さとう・まさあき 1955年飯館村生まれ、仙台市在住。新聞社勤務を経てフリージャーナリスト。「飯館を掘る 天明の飢饉と福島原発」で第1回むのたけじ地域民衆ジャーナリズム優秀賞。

▲ 6月16日 福島民友新聞掲載

記事から知り得たこと

[illegible]

疑問に思ったこと、調べてみたいこと

[illegible]

調べてわかったこと、考えたこと

This image shows a full page of primary-ruled paper. It features ten horizontal blue lines spaced evenly down the page. There are two vertical red lines on each side, creating three columns: a narrow left margin, a wide central writing area, and a narrow right margin. The paper is otherwise blank, with no handwriting or other markings.

これから「自分探し」の旅に出るであろうみなさん、
行先はどこになるのでしょうか。

